



二〇二〇春号
栃木県 栃木市
01 地と

- 3 商都蔵街
栃木市と嘉右衛門町のなりたち
- 7 蔵の街の花屋さん
Spirée fleuriste 芹澤 有沙さん
- 11 伝建地区 商い今昔
- 13 かかわりつながり
嘉右衛門町在住 太田裕子さん
建築士 佐藤大介さん
- 17 はなちやか
花・お茶・菓子で季節を愛でる
- 18 編集蔵話

栃木の街
人々の往来の拠点
地の歩みを
今に伝える

街と人
関わる場所
その地には
悠々と築かれた
様々な脈が
力強く走る

この地が秘めた脈
人々が触れ
新たな脈が生まれ
幾重にも重なり
地を厚くする

地で暮らす人
地を訪れる人
地へ移り来る人

この街の人の関わり
地が持つ脈を
伝えていきます



蔵商街都

栃木市と
嘉右衛門町の
なりたち

関東有数の商業都市であった栃木市
旧日光例幣使街道沿いには
かつての商都の面影が色濃く残る

◎文 遠藤百合子



嘉右衛門町伝建地区を南北に走る旧日光例幣使街道

舟運と街道で栄えた街

街道を歩くと目にする蔵の数々と、街の中を穏やかに流れる巴波川。

栃木県栃木市。この地は舟運と街道によって栄えた。現在も街の中心を南北に走る蔵の街大通りは「旧日光例幣使街道」とも呼ばれ、日光市へと続いている。

1617年「元和3年」に徳川家康の霊柩が久能山から日光山へ改葬される際、行列が栃木町（現在の栃木市）を通過し、それに伴い街道が整備された。その後、東照社（現在の日光東照宮）の建立に必要な物資が江戸から舟で運ばれ、栃木町で陸揚げをし日光へと運ばれたことが、舟運の街として栄える起源となった。農村や山林が多い栃木からは麻・木材・米穀類等が江戸へと運ばれ、江戸からは海産物・酒・砂糖類等がもたらされ、これらの売買で栃木の街は一層活気に溢れていた。

1646年「正保3年」、京都の朝廷から日光へ例幣使が派遣されるようになる。例幣使とは、幣帛と呼ばれる神に奉獻する供え物を持った使者のことです。その後二二年間、毎年春の日光の大祭にあわせ例幣使が栃木町を通過した。こうして例幣使街道の宿駅「栃木宿」として町並みがつくられていった。

大通りから嘉右衛門町へ

現在の蔵の街大通りを歩くと、通り沿いの建物のほとんどが店舗となっていることに気付く。江戸時代も街道沿いに店が立ち並び、様々な商売が営まれていた。現在の大通りの幅は一八メートル。これは江戸時代から今も変わっていない。当時はこの街道を、人や馬や荷車がにぎやかに行き交っていたのだろう。当時の特徴を今に残すものは、宅地割についても言える。空き地や道路脇の建物をよく見ると、大通りに面した店舗の奥に住居や蔵が数棟並び、まるでうなぎの寝床のような奥行のある敷地になっていることがわかる。「この店舗は江戸時代、裏側は巴波川に面していたんですよ」と、ある店舗の主が教えてくれた。当時は間口の広さを目安に税金がかけられた。そのため、できるだけ店舗部分を狭くし、奥行きを取る宅地割が一般的であったそう。

旧日光例幣使街道は、交番のある万町交差点から一旦西に逸れ、再び北へ伸びていく。この辺りは「嘉右衛門町伝統的建造物群保存地区」と呼ばれる地域で、大通りとはまた違った歴史の趣を感じる場所となっている。伝統的建造物群保存地区（伝建地区）とは「伝統的な建物やこれと密接な関係に



川のせせらぎを聞きながら、街道筋や史跡、路地を巡り、歴史に想いに馳せる街歩きを楽しもう。

ある樹木、庭園、水路、石垣等を含む歴史的なまとまりを持つ地区」として保存を図るもの。その中でも国が価値が高いと判断したものは、重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）となる。重伝建地区は全国に二一〇地区（令和元年一二月末時点）あるが、嘉右衛門町伝建地区は、栃木県内唯一の伝建地区であり、重伝建地区にも選定されている。

この地を切り開いた 岡田嘉右衛門

嘉右衛門町は、天正年間「1573-1592」に足利から移り住み、この地を開墾した岡田嘉右衛門の名に由来している。荒れた土地を耕し農地としたことから、この一帯は「嘉右衛門新田村」と呼ばれていた。1689年「元禄2年」には幕府領として、旗本畠山氏の陣屋（幕府直轄領の屋敷および代官所）が置かれた。陣屋は現在「岡田記念館」となっており、訪問者を迎え入れてくれる。館内の所々に面影が残り、当時の様子が伺える。なお、岡田嘉右衛門の名は代々襲名されており、現在の当主は二六代目にあたる。岡田記念館の門に掛けられた表札には「岡田嘉右衛門」の名が今も刻まれており、その隣に並ぶ「電話一番」の札が目をはきく。電話一番は、この地を切り開いた証でもある。

農村から商いの街へ

元々農村であったこの地域一帯も、時代の流れとともに商人の街として発展していく。江戸末期には多種多様の間屋や小売店が並び、賑わいを見せた。中でも注目すべきは、栃木を北関東有数の商業都市に導いた麻間屋が八軒もあったこと。他に居酒屋、質屋、醤油屋など現代でも馴染みの商売もある中で、楊枝屋、甘酒屋などの変った商売も。地域で何を営んでいたのか記載された古地図を覗くと、驚くほどたくさん業種の店舗が存在していたこと

がわかり、この一帯も活気があり賑やかだった様子をつかむことができる。

伝統的な建築様式

「木造真壁出桁造」と「見世蔵」

この地域の伝統的な店舗建築に『木造真壁出桁造』と『見世蔵』がある。木造真壁出桁造は字のごとく木造の建築様式で、軒先を出桁造とした建物。見世蔵は外壁を厚く土で塗り込めた漆喰仕上げの建物で、街道沿いの店舗として利用されていた。店舗部分が蔵造りであるのは、火災の際に類焼を防ぐためであったとされる。嘉右衛門町伝建地区にある「大貫家」は1834年「天保5年」に建てられた見世蔵で、現存する見世蔵としては全国で三番目に古い。その他にも、街道を中心に奥行きのある宅地割が残る家が多い。昔は敷地内にレールを敷き、裏手の川から引き揚げた荷物をトロッコに乗せ、店舗まで運んでいたようだ。「小さい頃は、トロッコに乗ってみんなで遊んだものだよ」と、地域のおじいさんが懐かしそうに話してくれた。

川から嘉右衛門町をみる

舟の舟積地や人や荷物の上げ下ろしをする場所を河岸といひ、舟運で栄えた栃木の巴波川沿岸には七つの河岸があった。江戸から栃木へ戻る舟の終点となっていたのは、嘉右衛門町伝建地区にある平柳河岸。嘉右衛門新田村の発展に大いに影響を及ぼしたと言われるこの河岸は、現在もその趣を残している唯一の場所。ついつい街道沿いの建造物に目が行きがちだが、平柳河岸も嘉右衛門町伝建地区を語る上では外せない場所なのだ。

この街には、いろいろな表情がある。街道筋を巡るもよし、川沿いを静かに歩くもよし。足を伸ばすところで街の見え方が変わる。そこが街の深みであり、土地のおもしろさだと思う。

蔵の街の 花屋さん

◎文 二川ナオミ



ペンダントライトが優しく照らす店内を覗くと
カウンターや壁に可愛らしい花たちが品良く飾られています。
洗練された佇まいのお店は、Spice fleuriste「スパイスフルリスト」。
店主の芹澤さんにお話を聞かせていただきました。

花との出会い

「ズビレン」というのはフランス語で「コデマリ」という意味です。私がフランスのお花屋さんで研修をしていた時期は、コデマリの花が出回る季節だったので、よくこの単語を耳にしていました。お花も綺麗ですし、可愛らしくて親しみやすい響きだったので店名にしました。元々、保育士として働いていたのですが、二〇代半ばの頃に手に職というか、人に喜んでもらえるような技術を身に付け仕事にしたい、と考えるようになってきました。結婚式場で偶然目にした装花の美しさに惹かれたことがきっかけとなり、この世界に足を踏み入れました。最初に働いた花屋さんがパリスタイルというコンセプトだった影響もあり、その後、思い切ったパリスタイルを学びにフランスへ行くことにしました。



花を楽しむ文化に触れ

私が研修を受けたのはローズパッドというパリのお花屋さんでした。すっきりとした空間に、まるでアート作品のように美しく洗練されたお花がディスプレイされていて、店内を埋め尽くすように飾るのではなく、空間の余白を大切にしているオーナーの姿勢に感銘を受けました。パリにはオーナーによって様々なテイストのお花屋さんがあります。フランスの人は今日のはあの店、というように用途によってお花屋さんを使い分けたりするようです。お呼ばれしたりされたりするときには当たり前のようにお花を用意します。男性がお花を買いに来るのも普通です。花束を持って電車に乗れば「どこのお店の花なの？」と話しかけられたり、お花が一つの「コミュニケーションツール」になっています。

日本のお客様は贈答用にお花を買われる方がほとんどで、自宅用に購入される方は多くないように感じます。お花をより身近に感じ、気負わずにお花のある暮らしを楽しむ、そんな文化が広まれば素敵だな、と思っています。

嘉右衛門町で商う

パリへ行く前は経営の大変さも身近に感じていましたし、自分のお店を持つことはあまり意識していませんでした。帰国後、またお花屋さんで働くうちに「自分の力でやってみよう」と思うようになり、地元でお店をはじめることになりました。正直なところ、自分でお店を開こうと思うまで嘉右衛門町にはあまり足を運んだことがありませんでした。商売なので大通りに店を構えようとも考えましたが、



落ち着いた蔵の街らしい場所がいいなとも思っていました。そんな中で出会った嘉右衛門町はひっそりとした雰囲気かびつたりでしたし、近くの味噌工場跡を観光拠点にする話もあり、将来性があると感じたので、ここにお店を出すことにしました。

お店の改装には三ヶ月くらいかかりました。コンクリートを敷きトイレや倉庫をつくり、エアコンを取り付けましたが、元々あった柵や欄間はそのまま活かしています。古い蔵なので夏は涼しいかと思っていたのですが意外とそうでもなくて、隙間から空気が逃げているような気がします。慣れましたが、冬は寒いですね(笑)。

スピレフルリストは二〇一八年の一月にオープンしました。その頃から、この地域のイベント「クラモノ」メンバーの皆さんとも仲良くさせていただいています。とても個性的で面白い方たちばかりなので、

和気あいあいと交流しています。お花を買いに来てくれたりもしますし、お店をはじめから街に徐々に馴染んできているように思います。普段の人通りは決して多くないですし、商売をする場所としての難しさも感じています。季節の花の魅力や楽しみ方を伝えることで、お店を好きになってくれる常連さんが増えたらいいな、と思っています。

街のこれからを想う

嘉右衛門町が観光地として盛り上がることも大切だと思っています。観光でいらした方だけでなく、地元の人にもこの場所の魅力を知ってもらいたいと思っています。食事をしたり買い物をしたりちょっとした休日を通してほしいと思えるような、身近な場所になれば素敵ですね。📍

芹澤有沙【せりざわありさ】 栃木県栃木市生まれ。
2018年嘉右衛門町にSpirée fleuristeをオープン。
spireefleuriste.com



スピレフルリストの入る建物。以前は野草や生け花の花材を売る店舗だった。

伝建地区 商い今昔

◎文 遠藤百合子

どこか懐かしい空気と穏やかな時間が流れる嘉右衛門町伝建地区。江戸末期には街道沿いに様々な店舗が立ち並び、活気に満ちていたことだろう。現在は古い建物が残るものの、多くは住居となっており、当時の熱気というよりは、日々の暮らしの温かみを感じる街となっている。

今も帳場で商いをする 荒物問屋の三代目

街道を北に進み、神明神社を少し越えたところに佇む一軒の店。「麻苧荒物商落合奥蔵商店」と書かれた、派手ではないが趣のある看板が目に残まる。「奥蔵というのは初代店主の名前だよ」と、三代目店主の落合さんが笑顔で迎えてくれた。以前は麻や箒などを取り扱っていたが、時代の流れにあわせ、現在は職人用足袋などを主に取り扱う。帳場で仕事をこなし、几帳面に帳簿をつけている姿は、きつと初代の頃から変わらぬ姿なのであろう。温和な落合さんの元には、ご近所さんが「散歩の合間の休憩だ」とお茶を飲みに来ち寄る。こんなやりとりがあるのも、この地に住み、店を守る人たちの昔ながらの日常風景なのだと思う。

歴史に身を委ね 仕事と向き合う

明治初期からこの地で肥料店を営む平澤商事株式会社。現在も四代目店主の平澤さんが、肥料や農薬を取り扱う会社として店を守り続けている。江戸時代、この地をはじめ、周辺には数多くの農村が存在した。農業には肥料が欠かせない。麻問屋同様、肥料屋もこの地域を語る上で外せない商売であった。



初代「平澤浅次郎」の名が刻まれた看板が、店主の背後に立つ柱に掲げられている。日々、歴史の重みを感じながら、仕事に向きあうということだろうか。机に向かう平澤さんを見ていると、それらは重圧としてのしかかるのではなく、むしろ歴史に見守られているという表現が正しく感じられる。「天井に格子があつて、昔は格子を外して荷物の上げ下ろしをしていたんだよ」穏やかに昔の話をしてくれる平澤さん。「昔と今と変わらないのは、土間特有の寒さだね」と笑う。

伝統の味を守り 今に伝える

江戸中期の天明年間創業の油伝味噌^{あぶぜん}。屋号に油の字がつくのは、創業当時は油屋を営んでいたからだそう。代々「傳兵衛」の名を襲名し、油屋傳兵衛から「油傳(伝)」となった。幕末に三代目が味噌製造をはじめ、明治期には味噌屋に。現在は味噌の販売とあわせて、敷地内の茶屋で味噌田楽や甘酒などを味わうことができる。

古い時代にタイムスリップしたような茶屋に足を踏み入れると、凛とした空気が身を包む。一本一本丁寧に味噌が塗られた田楽は、ひと口頬張ると、美味しさに思わず笑みがこぼれる。日光例幣使街道が賑わっていた頃、街道を行き交う人たちは道中のさなかに、こうした茶屋で一休みし、腹ごしらえをしたのだろうか、と想像を膨らませる。現在は若い店主夫婦が、伝統の味を守りながら、より多くの人にこの味を伝えるべく、日々仕事に励んでいる。

この街で昔ながらの商いを代々守り続ける人、この町並みに惹かれ、新たな商いをはじめた人たちがいる。

世代も、商いの業種も異なるが、共通して感じるのは、この地を重んじ、自分の商いに誇りを持ち、真摯に向きあい、根を張っていこうとする姿勢。この地に長年たらずみ、時代の変化を見てきた建物の中で、正直な商いをする。そんな人たちの姿がここには、ある。📍



かかわりと つながり

◎文 小野悦子

古い記憶が息づく蔵の街に心惹かれ
伝建地区に移り住んだ太田裕子さんと
地区の歴史ある建造物を改修し
借り手につなげる活動に
携わる建築士の佐藤大介さん
それぞれの縁に導かれ
嘉右衛門町との関わりを
深めつつあるお二人に
これまでの歩みと街の魅力をつかぎます



「これですこれです」幼い頃、自転車を漕ぐ
母親の背中から眺めた石にも歴史が宿る。

嘉右衛門町に引越したのは、忘れもしない令和元年五月一日。まさか伝建地区に空き家が見つかるとは思ってもいなかった。そこで「住所に嘉右衛門町って書けるんだ！」と興奮しましたね。しかも、母の生家の跡地に歩いていける距離なんです。幼い頃の記憶はおぼろげですが、近くの道路脇に大きな石が置いてあったことを覚えていて、その石は今も苔むした姿で同じ場所に残っています。ご縁って不思議なものです。

実際に暮らしてみると、とにかく街の人たちがあつたかい。ご近所に自治会長さんが住んでいて、とても面倒見の良い方なんです。ご高齢ですが、誰から頼まれたわけでもなく、街のことを想って毎朝通りのお掃除をされています。その姿に感化され、我が家も月に一度、地域の清掃活動に参加するようになりました。お掃除仲間に「市民の卓球大会があるからお子さんも参加しない？」と誘っていただき、地域のみんなで一丸となったことも印象に残っています。困ったときに助けあえるので、子育てがしやすく、歳を重ねてからも安心。春になると窓から見える桜が満開になり、本当に綺麗なんです。「ここに根を張って生きていきたいなあ」としみじみ思いますね。

住所に嘉右衛門町って書けるだけで幸せな気持ちになるんです。

太田 私は生まれも育ちも栃木市ですが、結婚を機に夫の実家がある長野県に移り住み、八年ほど離れていたんです。当時は長野に骨を埋めるつもりでしたが子どもが生まれてから、栃木に戻って子育てをしたいという想いが強くなり、家族に相談しました。外に出て改めて、故郷に対する愛着に気づかされたのだと思います。希望を受け入れてもらえたときは、ありがたい気持ちでいっぱいでした。栃木市内で家を借りて一〇年ほど経った頃、子どもの進学にあわせて自分たちの家を持つとうと、嘉右衛門町を第一候補に物件探しをはじめました。実は、この街は母の生家があった思い入れの深い場所。私が三歳の頃、その家を切り盛りしていた母方の祖母が亡くなり、見かねた母が家事を手伝うために市内の自宅から通い続けていたんです。運転免許を持っていなかったので、幼い私をおぶって自転車で両家を往復する日々。その後、生家は取り壊されてしまったので、嘉右衛門町に居場所ができた。母が喜ぶだろうし、私自身、愛犬に「蔵」という名前をつけたほど蔵の街が好きなんです。前の家に住んでいた頃から、よく「蔵」を連れて嘉右衛門町を散歩していて「こんなところで暮らせたら…」と想像を膨らませていました。



太田裕子【おおたひろこ】 栃木県栃木市生まれ。高等学校を卒業後、看護師免許を取得し、病院に勤務。2019年から家族と共に嘉右衛門町で生活をはじめ。蔵の街や古道具、手作りのクラフトに深い愛着を持つ。



佐藤 子どもの頃から設計事務所を営んでいる父の背中を見て育ったので、建築や設計の仕事に興味を持ったのは自然な成り行きだったのかもしれませんが。専門学校を卒業後、設計事務所や内装会社で経験を積み、二〇〇九年に地元の宇都宮市で「創右衛門一級建築士事務所」を立ち上げました。設計の段階からお客さんの希望を直接うかがい、専門家として助言をしつつ、より良いものを共同で造り上げる過程に魅力を感じています。顔の見える関わりを大切にしたいので、設計するのは大がかりな建築ではなく、戸建ての住居や小さな店舗の新築や改装。家は人が一生暮らし続けていく場所ですから、ワクワクするようなカッコよさと快適さを兼ね備えた空間であってほしい。そんな想いで、自然素材を活かしつつ、太陽や風などの自然エネルギーを上手に調整できる、心地よい住まいづくりを心がけています。

所属している栃木市の建築士会で市内の方々との交友が広がり、古い町並みの防災研究をする大学の先生を中心に建築士や大工等で結成した「かえもん暮らし」の一員として、伝建地区の古い空き家を改修し、借り手とつなげる活動にも取り組んでいます。

太田 現在は築三五年の比較的新しい家で内装も綺麗な状態だったので、少々手直しが必要で、市役所の方に相談したら、かえもん暮らしの佐藤さんを紹介いただいたんです。希望を叶えてもらえて本当に助かりました。

佐藤 伝建地区には古い町並みを維持するための建築規制があるので、建物を改装する際には市役所に相談するんですよ。暮らしはじめてから、街の印象は変わりましたか？

太田 二〇一〇年間で観光客がかなり増えたと思います。二〇一一年から伝建地区の空き地や空き店舗を活用した「クラモ。」というイベントが開催されていて、歴史ある建物で手作りのクラフトや飲食を楽しんだり、着物を借りて蔵の街を歩いたりできるんです。年々出店者数も増え、全国各地からお客さんが集まるようになりました。イベントを機にリピーターが定着し、訪れる度に新たな魅力を発見できるようにすれば、一過性ではない広がり生まれそうですね。

佐藤 嘉右衛門町は、時代の流れと共に古いものと新しいものが混ざりあい、緩やかに独自の文化を育んできた街。市が伝統的建造物を保存するために動き、街に惹かれて移り住む太田さんのような人が増え、地元の住民と協力しながら新たな魅力を創り出し、外にも発信している。型にはまった政策の結果ではなく、おのずと人を呼ぶ連鎖が生まれ、活気づいている印象です。

太田 ただただ嘉右衛門町が好きで動いている人たちが多く、私自身、ここに来てからはじめて街のために役立ちたいと思うようになりました。食べることが大好きなので、何らかの形で、地域の子どもたちや

自然と年月を重ねてきた街の魅力をこれからにつなげたい。

改修作業の第一歩は、調査。たとえば江戸時代の建物ですと、長い年月の間に住む人が変わります。西洋文化を取り入れてきた時代を経て、建物自体も変化し続けているので、創建当時や繁栄期など、どの時代にあわせて直すかを見極める必要があります。生活習慣や間取りを調べて当時の姿を想像し、壁や襖などの痕跡を探すといった地道な作業。床下に入って真つ黒に汚れたり蛇の抜け殻が出てきたりと、決してキラキラした現場ではありませんが、柱に古い落書きが見つかったりすると、グツときちやいますね。

言葉ではうまく表現できないのですが、自然に年月を重ねてきたものにしかない良さがあつて、昔の建物がそのまま残っているだけでもすごいことなんです。「重要伝統的建造物群保存地区」という国からお墨付きをもたらした街という時点でポテンシャルを認められていて、それは大きな財産だと思います。

伝統的建造物の改修には、とてつもない時間と費用がかかりますし、せつかく直しても利活用方法がなければ先が見えてきません。「かえもん暮らし」を通して、街全体が元気になっていくような役割を担えたら嬉しいですね。



佐藤大介【さとうだいすけ】 栃木県宇都宮市生まれ。専門学校卒業後、設計事務所勤務。2009年に「創右衛門一級建築士事務所」を設立。嘉右衛門町伝建地区の空き家の改修・利活用に取り組む「かえもん暮らし」のメンバー。
www.souemon.net

足元に想いの種を撒き 誰もが誇りに思えるまちへ

お年寄りにおいしいご飯を提供できる場を作れたらと夢見ています。お弁当屋さんや惣菜屋さんを開いて、地域の「おつかさん」になれたら素敵だなあ。釜でご飯を炊いて、割烹着姿で「はい、一〇〇グラムね〜」って。

佐藤 伝建地区に住んで商うなんて最高じゃないですか。観光向けのイベントだけではなく、そういった生活に根づいた営みを広げることが、地に足の着いたまちづくりにつながると思います。蔵を改修してライブハウスを開いたり、広場で盆踊りを開催したりするのも良いんじゃないかな。地域の未来を担う若い世代を含め、地元の人たちが誇りに思えるような街を育んでいきたいですね。

太田 そんな関わり方ができたら最高です！構想を実現できる日が来たら、また佐藤さんに家の改装をお願いしたいです。

佐藤 それはもう喜んで！



花・お茶・菓子で
季節を愛でる

はな ちやか

文 二川ナオミ

伝建地区にたえずむ江戸時代末期の見世蔵「大買家」では、一年を通して様々な催しが開かれています。その中で、季節ごとの花、お茶、菓子を楽しむ会として開催されているのが「花・茶・菓(はなちやか)」。

主催するのは栃木市地域おこし協力隊の遠藤さんと島田さん。春は穀雨、夏は小暑、秋は秋分、冬は大雪と言った具合に、季節を表す二十四節気と、なるべく参加者が来やすい日とをあわせて開かれるのだとか。

お茶は、抹茶、新茶、ほうじ茶など季節によって変わります。緑茶とほうじ茶は栃木市藤岡地域にある岸本園製茶工場のもの。作り手の岸本さんが茶畑や製茶工場で働く姿を伝えながら、島田さんが一杯ずつ丁寧にお茶を淹れてくれます。菓子は地元のお菓子の店、山本総本店のものを。季節を表現した練り切りは、この会の季節感をより一層引き立てます。草花は河原のススキや庭の南天など身近に生えている植物を飾ります。

参加するのは、近所で働いている方や子育て中の方が多くそう。好みの菓子や豆皿を選ぶ中で、自然と参加者同士の会話もはずみずみ。食べる機会の少ない練り切りの美しさや、市内に茶園があることに驚く方も多いためだとか。「この会を通じて市の魅力を再発見してもらえたら」と主催の二人は話します。

季節の花を愛でながらお茶と菓子をいただき、ひと息つく。やろうと思えばいつでもできることですが、純粹にそれだけを楽しむ時間と余裕は意外に少ないものです。この地とともにあるものに思いを馳せる穏やかな時を感じてみてはいかがでしょうか。📍



蔵の街を流れる巴波川には、市の鳥である鴨や白鷺、青鷺、川鵜などの鳥たちが暮らします。散歩をする人が川沿いに近づいても、特に気に止める様子もなくのんびりしています。この穏やかな雰囲気も、遥か昔から続いているものなのかもしれませんね。
絵／小春あや coharuaya.com

編集蔵話

蔵の街として、多くの観光客が訪れる栃木市。手漕ぎ舟に乗りたり、大通りの町並みのみを散策し帰られてしまう方もいますが、古くからの建物や町並みが残る嘉右衛門町伝建地区まで足を運んで欲しいという想いがあります。伝建地区は全国にあり、見事な建物や統一された景観を楽しめる場所もたくさんあります。そんな中で嘉右衛門町伝建地区は、古い建物が残る二方、現代の建物も混在した町並みになっています。他の伝建地区を見に行ったことがある人は少々拍子抜けするかもしれませんが、ここでは伝建地区で暮らす人の日常生活垣間見ることが出来ます。暮らしの営みがあるからこそ街に愛が感じられ、建物に息吹が感じられるように思っています。それを伝えたく、今回「地と」では、伝建地区としての建物や町並みの紹介だけでなく、そこに暮らす人、商いを行う人、古くからこの地に根付いている人、この地に戻ってきた人など、様々な視点で綴り広げられる「営み」に軸を置き、冊子にまとめました。この場所で暮らしているからこそ見る、このできる視点を、皆様にお届けできたら嬉しいのです。

地と

第一号 二〇二〇 春号

発行日 2020(令和2)年3月31日発行

発行／栃木市総合政策部 蔵の街課

T 028-8686 栃木県栃木市万町925

電話／0282-21-2571

編集／アートディレクション：ゼイン／石川聖太(イロ)

撮影／アタタケジ

絵／小春あや

取材・執筆／遠藤百合子／小野悦子／二川ナオミ

印刷・製本／第一印刷株式会社

本誌内容の無断転記・記載・複写を禁じます。

©地と all rights reserved.



発行 栃木市 総合政策部
蔵の街課



地と 第1号 2020〔令和〕年3月31日発行